

C I Fスコットランド研修報告会記録

本年5月7日から1か月間、C I Fスコットランドが主催する国際研修に青木雅子さんが参加され、帰国後の7月はじめ東京で報告会が行われました。C I Fジャパンメンバーとして、青木さんの研修参加を支援するため、坂本正路氏、梶村慎吾氏等とともに面接・推薦などの労をとってくださった滝口桂子さんが、研修報告会の様子を記録してくださいました。会員の皆様のボランティアの活動により、C I Fジャパンの事業がすすめられていることを感謝をもってご報告いたします。

青木雅子さんは、C I Fと出会ったことにより研修に参加することができ、豊かに成長させていただいたと、出会いの経緯と感謝の思いを寄せてくださいました。(6ページ)

記録者 瀧口桂子
1971年 クリーブランド

開催日 2011年7月3日(日) 17:00~20:30
場所 救世軍渋谷小隊(教会) 2階ホール
報告者 青木雅子
テーマ 「豊かな人生を送るスコットランドの人々と福祉の世界」
参加者 9名 梶村 豊福 坂本 浅野 青木 瀧口 (以上C I F ジャパンメンバー)
寺澤 岩見 馬場 (救世軍その他)

<報告内容>

1 研修参加の動機と目的

人が生きること、とくに高齢者が豊かに生きるとはどういうことかについて考えている。

ナースとして現在勤務している有料老人ホームはかなり高額な利用料で、物的生活環境としては恵まれている方であるが、入居者の生活の質は豊かとはいえない。さまざまなプログラムは組み立てられているが、利用者は受身で与えられているからそれらをやっているにすぎず、生きがいをもって生活しているようには思えない。また職員も一人ひとり尊厳をもってケアしているとはいえない貧しい状況である。このような現状を何とか変えていきたい、そのための研修の機会を求めている。

2 CIF研修をどのようにして知ったか

自分が考えていることにぴったりのタイト

ルの本が出版されたことを、たまたま開いた新聞広告で知り、熟読した。梶村慎吾氏の著書『人生を豊かに生きるために必要なものは何かー理想の高齢者施設を求めてジュドソン・リタイアメント・コミュニティに学ぶ』である。その本によりCIP/CIF研修について知ることができた。

3 スコットランド研修日程とプログラムおよび参加者やホストファミリーについて

写真を見ながらの説明、感想など

4 施設等の見学(名所・旧跡観光も含めて)

…3と同じ

5 スコットランドにおける園芸療法など、認知症(dementia)の方のQOLを高めるための取り組みについて

①老人ホーム、デイケアセンターなどで印象に残ったこと

・施設全体の環境が美しく保たれていること
…家具、装飾、利用者の作品展示、庭など

②利用者一人ひとりを大切に生活、その人の心身の状態やニーズ、個性に合わせたプログラムがきめ細かく工夫され、ゆったりと豊かに暮らしていることなど

・入浴の際にホイスト(hoist)による移動
・利用者がペンダントのように胸に下げている非常用のブザー(ナースセンターに連絡される)の活用
・嚥下障害のある利用者への食事・飲み物の

FRUITS FROM EXCHANGE PROGRAMS

工夫…トロミをつけるなど

- ・趣味、残存能力を活かしたアートクラフトなどのプログラム

③活動事例…Dementia Café, Comment Cards

- ・ある認知症のケアセンターでは月に2回、利用者とその家族、職員がセンター内のカフェでお茶を楽しみながら雑談したり、悩みを分かちあうなど、コミュニケーションを大切にしている。カフェの壁には一人ひとりのコメントカードや利用者の作品である版画などが飾られている。

④認知症について広く、深く理解するための種々の講座・研修など

- ・スコットランドにおいても Dementia（認知症）について市民一般はもとより、福祉施設、病院、保健センターなど専門機関で働いている職員の理解もまだ十分ではない。そこで家族や多くの市民が認知症について関心を持ち、初歩的、基礎的な学習ができる各種のパンフレットやビデオ、講習会などが用意されている。また専門職の人も率先してそれぞれのレベルに応じた講習会や専門研修プログラムに参加して学んでいる。
- ・自分もビデオを見たり講習会や大学の講義を聴講した。医学的な知識、症状や行動上の問題、タイプやレベルによる治療の方法やケアのあり方など、認知症についての総合的かつ専門的な講義がなされていることに感心した。

⑤認知症の園芸療法について

- ・園芸療法の利点・特徴は多角的アプローチが可能なことである。その人の症状、障害に合わせてソーシャルワーカーがプランニングし、ケアラー(介護職員)が実際の活動、作業に携わっているようである。
- ・園芸療法を活かした庭の造り方の例…認知症の方が混乱したり不安感をもたないための配慮としてシンプルであること（道はまっすぐに）、壁は低く、段差や坂がないこと、影(陰)や反射を作らない工夫、毒のある植物は植えない、など
- ・中庭の効果…徘徊を避けられる、遠くから利用者の動きを観察できる



研修報告会にて（左端 滝口桂子さん）

- ・認知症の方が園芸療法によって落ち着き、薬の量を減らす効果が上がっている。
- ・大学などで園芸療法についての講義や研修が組まれている。
- ・認知症の方にとって園芸療法は様々な観点からよい影響や効果があることは認識されているが、まだ実際に施設などで積極的に取り入れられているとはいえない。また実施されている場合も、定期的なアセスメント、エヴァリュエーションなどは行われていないが、日常生活のなかでガーデニングが大切にされているスコットランドの伝統的な暮らしを基盤にして、客観的裏付けを得ながら今後の発展が期待される。

今回 CIF スコットランド研修に参加できたことを感謝している。専門的な学びだけでなく多くの方との交わりやスコットランドの伝統・文化や価値観にふれ、豊かに生きるとはどういうことかをさらに深く考え、実践していきたいと思っている。

* 青木さんが研修で得られた資料のコピーを事務局に提出してくださっています。

（神奈川県在住）

研修にいたるまでの「CIF」との良き出会い

青木 雅子

2011年 スコットランド



今回の英国スコットランドでの研修は本当に素晴らしいものでした。ここでは、多くのことを記述できませんが、特に英国における社会福祉に対するソーシャルワーカーの問題解決に至るまでの熱心で真摯な温かい心と行動力は感銘を覚えるほどでした。わたくしは、「CIF」の研修を通しまして個人的にも人生の価値観が向上いたしました。こうしたすばらしい「CIF」との出会いは偶然新聞の閲覧を介しまして、もたらされたものでした。

わたくしはナースとして以前より『老年看護学』に関心がございましたが、実質的には老人施設での経験が浅く、当然ですが現実と定義上での高齢者に対する理想的な生活支援との大きなギャップの存在に気が付きました。そのため、現実に対する落胆と理想への戸惑いの狭間で仕事に臨んでおりました。

ご承知の通り高齢者は、長年の生活や人生経験の個人的な価値観が違います。慢性疾患や健康障害なる合併症もあります。そうした障害や疾患を持ちながらも、その人らしく生活を営むことができるよう支援していくこと、すなわちQOL(Quality of Life:人生の質)を高め、その人の持てる力に着眼して日常生活を通して支援し

ていくことが重要です。

QOLが高まればADL(Activities of Daily Living:日常生活動作)も高まり廃用症候群をはじめとした2次的要因による健康障害を防ぐことが可能であると考えておりました。そうした理想を「高齢者の生活行動の中に構築させたい」という希望がございました。

そんな折、2010年3月22日(嬉しさに日記に記述あり)4階のナースステーションのカウンターに置かれてある新聞の新書紹介欄に偶然に梶村先生のご本のご案内が目にとまりました。「偶然」と申し上げましたのは、前日に閲覧された新聞を介護ヘルパーが新聞ラックよりはずし、新聞を4つ折りにして倉庫に持参するところでしたので、ほんの少しでもタイミングが合わなければ目にする事は不可能でした。

梶村慎吾 編・著『人生を豊かに生きるために必要なものは何か』太陽出版(2010)

その中にはサブタイトルとして「理想の高齢者施設を求めて」と記述され、日英対訳のご本でしたのでますます関心が高まりました。中を閲覧すると内容は深く趣があり、米国での高齢者施設ジェドソン・リタイアメント・コミュニティを通して特に私が印象を強く受けましたのは、QOLに影響を及ぼす「人としての豊かさ」が理解しやすく展開されておりました。そして巻末には、「CIF」について紹介されており、そこで私は初めて「Council of International Fellowship」の組織について知ったのです。この「CIF」との良き出会いが高齢者の理想の豊かさと共に英国での社会福祉の研修を介しまして私自身も「豊か」に成長させていただきました。心から感謝申し上げます。

(株)フロンティア看護師、神奈川県在住)